

戦後数年間 先生も生徒も耐えた

無職 木村 明人

(熊本市 77)

戦争が終わって3、4年は、あれにも耐え、これにも耐えた日々だった。

旧制中学校に入ったのは終戦の翌年。校舎は戦火で焼失したため、中学校の近くにあった旧陸軍の兵舎で学んだ。造りは頑丈でこつこつとした感じだった。その一室に2家族の先生が仮住まいしておられた。

ともあったが、いつも笑顔だった。

先生たちは服装も着たきりだった。旧師範学校の制服、旧軍服、よれよれの背広など。

薄い板と布のカーテンで仕切られていたが、お互いの生活は筒抜けのようであった。小さい子供を抱えての炊事や洗濯に、先生たちはどれほど苦労されたことだろう。

忘れてたいことがもう一つ。学校のプールの脇に住んでおられた先生。日が沈む頃、「風呂に入るぞ」と言っ、プールにつかっておられた。顔を合わせるこ

それでも学校はとにかく明るかった。先生と生徒に共感するものがあつたからだろう。暮らしは低く、思いは高く。耐えることは苦痛ではなかつた。振り返れば、それは戦争がもたらした数少ない美德の一つではなかつたかと思う。